

デパートの中の保育室

江波諄子

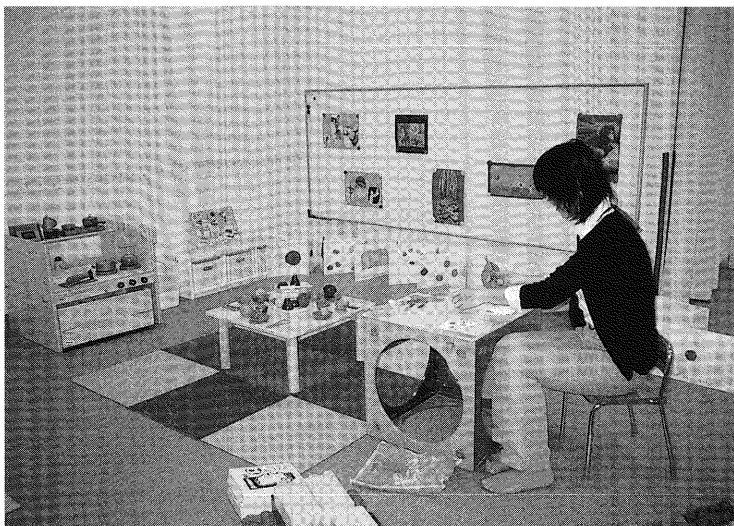
平成十七年、街の中心にある老舗百貨店が、新しく生まれ変わることになり、その中に私の所属する大学で保育室（一時預かり）を出さないかという話がかち上がりました。大学が「保育ビジネス」に参入するなど、これまで全く視野にありませんでしたが、本学で産学協働が薦められているので検討することになりました。

手初めに、商業地域の中にある全国チェーンの一時預かり託児室を見学することになりました。そこは、およそ六、七十平方メートルほどの部屋に、敷物を敷き、プラスチック製や布のおもちゃが少しあり、二、三人の保育士が子どもをおんぶしたり、遊ばせているという状況でした。子どもは親の用事が

終わるまで、人工的空間で時間を潰しているというような個人的な印象を抱きました。

現場や大学等で保育研究が盛んに行われる一方、ものすごいスピードで保育ビジネスが街に台頭しているという現実を見、そしてその内容に対して無関心でいてよいのかという疑問もわいてきました。

子どものことを最優先に考えてよいという条件で、大学経営者と幼稚園や大学の教員による前向きな取り組みがスタートしました。まず既に進んでいる工事現場を見学し、ハード面で次の要求をしました。①床のカラフルなカーペットを外し、コルク床にすること ②トイレ室へ入る部屋のドアを撤去し、カーテンにすること ③床から一メートルくら



▲保育室の準備

いの所に、壁面利用のためのホワイトボードを取り付けること ④受付テーブルは子どもと対面できるように低くすること—などでした。

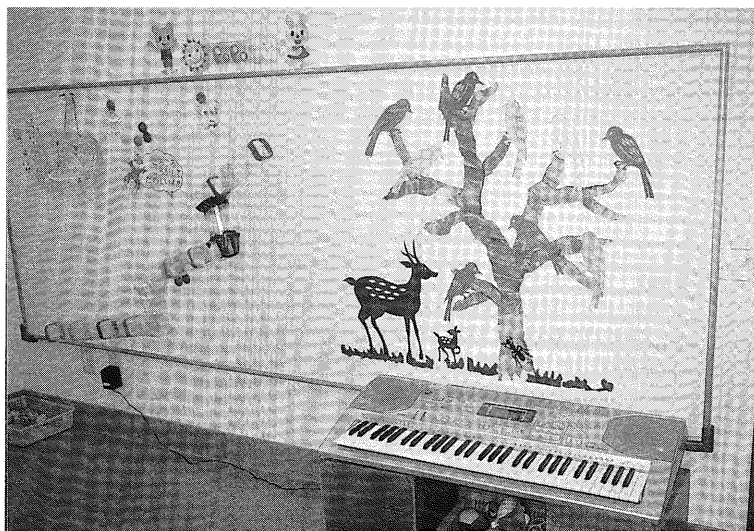
次に、中心となる保育士を決め、保育の基本方針の作成に取り掛かりました。どのようなプロジェクトも人次第です。幸い、子育て経験中のベテラン保育者を大学内の幼稚園から抜擢することができました。(デパートの) お客様へのサービスでもあるため、保育の基本方針には、これまでの幼稚園のそれとは異なる要素も加わりました。つまり、利用者に対する細心の配慮と、品格あるマナーが意識して強調されました。

それらは次のようなものでした。

・ 保育時間が子どもにとって安全・安心な時間であることを保障する。

・ 「あ〜楽しかった!」、「また来たい!」と思われるような保育内容を提供する。

- ・保育者は常に笑みを絶やさず、美しく、温かい言葉の使用に努める。
- ・保育者は清潔で明るいきちんとした身だしなみを心がける。
- ・不安を感じている子には努めて身体的な接触を試みる。
- ・一時的に子どもから離れるときはその旨を子どもに伝える。
- ・子どもの年齢にふさわしい遊びを準備するが、遊びを強要しない。
- ・子どもが興味をもちそうな遊びを子どもの中に発見し、援助する。
- ・子どもが遊びを無理なく発展できるように援助する。
- ・一時的な仲間との出会いが楽しい経験であるよう援助する。
- ・子ども間のトラブルは双方が納得し、受け入れられるよう努力する。



▲ホワイトボード上の遊び空間

- ・保育教材は常に各年齢にふさわしいものを準備しておく。
- ・保育内容は固定したものだけにならないよう常に工夫し定期的に変化を試みる。
- ・保育室は常に清潔に保ち、保育の前後、必要に応じて保育の合間に掃除をこまめにする。
- ・保育室内には季節感を取り入れ、草花や木の実などの自然物や、小さな生き物を短期間置く。
- ・時間を限って室内に心地よいクラシック音楽を低音で流す。
- ・目の前の子どもにとって不必要な言葉（外見や親の批判など）は慎み、保育者間の私語やひそひそ話は絶対に行わない。
- ・利用開始時は保護者を明るく丁寧に見送り、利用時間終了時は子どもと保護者に利用に対する感謝の念を伝える。

そのほか、一時的な預かり場所なので、保育者の顔写真と名前は毎日壁に示し、保育者自身はカラーエプロンを着けて、子どもに覚えてもらうことにしました。案の定、短時間のうちに、子どもは「ピンクのせんせい」などと認識することができました。また、保育室のキャッチフレーズは、「お子様にも豊かな時間を！」とし、保護者が買物をしている間に、子どもたちにも彼らにふさわしい豊かな経験をしてもらおうと考えました（預かり対象年齢は1歳から小学校就学前まで）。

具体的な事務処理方法は、ノウハウがないため、榎本正明大学幼稚園園長と横瀬主任保育士が大変な苦勞をしてつくり上げました。また、保育室内外の壁面はアトリエリスタの浅野はま江保育士を主に、いわゆる子どもっぽい装飾だけに終始しないよう、芸術的感性を存分に取り入れた作業をすることにしました。

こうしてさまざまな制限はありますが、コストは

省みず、私たちの能力を結集してデパート内の子どもも一時預かり施設「P o p o」が始まりました。

さて一年半がたち、「P o p o」は子どもたちにとってどのような場所であったのでしょうか。主任保育士横瀬薫さんの記録を参考に振り返ったことを、次の三つにまとめてみました。

最初は誰でも不安

子どもたちは、事の次第を十分に理解できないで預けられるためか、最初は泣いて保育士に抱っこされたり、他人が近寄らないように警戒し自分の場所（安全圏）にしがみつくような態度が見られます。

もちろん、子どもによってはすんなりと部屋に入れる子もいます。何回か経験を重ねていくと、お気に入りの保育士をエプロンの色で探したり、段ボールの小さなおうちや水槽の生き物やおもちゃと共に安定していきます。保護者が買いい物に行き、一人に



▲ガラス壁面

なつて寂しくなつてしまった子ども（にぎやかな環境が好きな子）には、三人の保育士が寄り添うこともあります。

経験豊かで、きめ細かいかかわりのできる保育士がどんなに最善の努力をしても、子どもが新しい場所で保護者と離れて過ごすという不安を、すべて取り除くことはできない無力さを感じます。一時預かり施設そのものが、極めて最初は子どもに不安を与える場所なのです。少なくとも利用が終了した時点で、子どもが良い大人と出会え、警戒感から最終的

には信頼感へと変わる感情を抱けるよう努力して
います。

オアシスとしてのスポット

利用日が固定し、継続的にやって来る子、保育者
の援助で新しい友達と出会える楽しさを知った子
は、「○○ちゃんの先生の所へ行こう」と親にせが
んでやって来るようになります。一人っ子の子ども
は、保育士や別の世界で育ってきた友達から受ける
刺激や異年齢の子とのかかわりが楽しみなよう
です。また年子の兄のいる二歳児は、最初兄がい
ないと不安のようでしたが、今では自分だけの世界に浸
れる居心地のよさも経験しているようです。

利用は必ずしも親の買い物時だけではありません
ん。母親が二人の子どもを幼稚園に登園させた直後
に、二時間利用する子（一歳八か月）。母親が第二
子妊娠のため利用する子（一歳六か月）。赤ちゃん
が生まれたばかりの家庭の一歳十か月児。どちらも

一人っ子の三歳児と五歳児。繰り返し利用で、自分
の居場所を見つけた子どもたちは、「まだ帰りたく
ない」と言って買物物の済んだ母親に、延長利用を
ねだることもあります。

保育メセナ

こうした場所は、保育の質を優先すればするほ
ど、ビジネスとしては成り立ちません。収益を上げ
るためには、子どもの利用時間を長時間に延ばした
り（「Popo」では利用最長時間は、一回につき
三時間）、保育士の数を抑えて、保育内容の質を落
とさなくてはなりません。

企業のメセナは対象を文化芸術活動としています
が、本学では対象を「子ども」とした社会への応援
活動として位置づけています。このような大学のポ
リシーがあつてこそ、保育士たちのゆとりある人間
的なまなざしが、子どもに注がれると考えており
ます。

（常磐短期大学）